

未来への伝承

象の意匠にみる歴史

—土屋家刀剣の鐔—

ここに一枚の鐔があります。土浦藩を治めた大名土屋家が所有していた刀「無銘(吉次)」に付属するものです。鐔とは刀を握る拳を守るための防御具です。

素赤の地金に表裏にわたって、象の姿を描いています。地金から彫り出したものではなく、銅と銀を混ぜた臙銀を、高彫という技法を用い、盛り上げて表現しています。

象に注目してみると、やや丸みをおびた大きな体格や長い牙、やや小ぶりな耳といった特徴から、牡のアジアゾウであることが分かります。

ここで象の鼻先にも注目してみましよう。鼻で持ち上げた棒状のものは「への字」に大きく折り曲げられています。よく見ると節が見えることから、竹のようです。大振りな竹をいとも簡単にへし折ってしまう、象の力強さを表しているのでしょうか。

直径7センチほどの大きさの鐔に、象の特徴とその勇壮さ、力強さを見事に表現した作品です。

政随は元禄9(1696)年に生まれ、江戸神田の豎大工町に居を構え、明和6(1769)年に73歳で亡くなっています。彼は刀装具を拵えることに長けた奈良派の金工師利寿に師事し、技を磨きました。後には「浜野派」と呼ばれる一派を形成しています。

さて、政随が33才となった頃、世間をにぎわすある出来事がありました。象の大通行、享保14(1729)年のことです。

前年6月13日、牡牝2頭の象は唐船で長崎へ入港しました。このうち牝象は9月11日に死亡しています。残った牡象1頭は翌14年3月13日に長崎を出発し陸路にて移動しました。4月28日には京都で中御門天皇と公家たちが見物しています。その後、5月25日に象は江戸に到着しました。そして、27日には江戸幕府8代将軍徳川吉宗と9代将軍家重が見物しました。

この間、京都・大坂・江戸の三都では、かわら版や書籍が刊行されたり、人々が象を見ようと芝の浜御殿へ押しかけたりするなど、「象ブーム」が起きました。江戸時代までの日本において、象の渡来は計8回確認できるとされています。今回取り上げた享保13年

は、第6回目に当たります。前回の渡来が慶長7(1602)年であったことから、約1226年ぶりの珍事であったと言えるでしょう。

残念ながら、政随が象を見たという記録は残されていません。象自体も、仏教画の中でもたびたび取り上げられており、その存在は認知されています。しかし、この象の造形の精密さと作製された時期を考えるならば、象を目にした時の迫力を、あるいは見聞きした印象を、作品に込めたのではないのでしょうか。この鐔は、ただ美しいだけではない、当時の世相もうかがうことが出来る作品と言えるでしょう。

今回御紹介した資料は、9月17日(月)まで展示しています。どうぞご覧ください。

岡市立博物館 (☎824・2928)



▲無銘(吉次)に付属する鐔 表



▲無銘(吉次)に付属する鐔 裏